

## はじめに

私と愛橋博士との関係は、ストレートには説明しづらい。私は物理学者でもなく、科学史研究者でもない、愛橋博士を研究の対象としているわけでもない。もともと日本史を専攻し、京都で考古学の発掘調査等にたずさわっていた者であった。東日本大震災の際、被災地で多くの個人収蔵資料が津波の被害を受けたことを知った時、大学や地元の有志の方々が行う資料保存活動に参加した。その時、欧米諸国では、どんな小さな町にもアーカイブズという、町の歴史に関わる記録を保存する公的施設があることを知った。その制度や社会的位置づけを体感し、アーカイブズ学を学ぶために、この分野の先進国であるイギリスへ渡ったのがそもそもの始まりだったのである。

「アーカイブズ」という「施設」は、日本ではまだあまり知られていない。文書館、公文書館などの名で翻訳されることが多い施設で、簡単に言うならば、個人や団体、組織が作成・収受した記録を、現在・将来にわたって、管理・保存し、利用に供する機関（公的・民間を問わず）である。過去の記録は現在の意思決定のための重要な「情報」源となる。そのため、昔から記録は常に権力のそばで管理・統制・独占されてきた。それが、ヨーロッパでは1789年のフランス革命をきっかけとして、国・国民を支配・管理した記録は、国民に帰すべきという考え方が広がり、近代アーカイブズが誕生する。この考え方は民主主義を支える仕組みとして広く欧米諸国に拡大、国家や自治体政府の活動を国民がチェックするための機能として、社会に根付くこととなった。そのため、欧米諸国では、国や地方政府機関はもちろん、企業や病院、学校、市民団体にいたるまで、活動の記録を保全・保管する「アーカイブズ」を持つことが広く一般的となっている。

そういったアーカイブズで、資料の収集・保存を行い、資料を利用する人の手助けをする専門職がアーキビスト（archivist、或いは information professional 情報専門職ともいわれ、一般に情報管理学コースの修士号を取得しているのがイギリスでは一般的）である。私はこのアーキビストとなることを目指し、イギリスに留学することにした。イギリスにはこういったアーカイブズ学／情報管理学を学べる大学が6つあり、そのうちの一つがグラスゴー大学だった。

グラスゴー大学は、1451年創立の、スコットランドで2番目に古い大学である（イギリス全土では4番目に古い）。そのため、創立以来550年以上にわたる様々な記録を保存するアーカイブズを持っている。グラスゴー大学アーカイブズは、そうした組織としての大学の記録を保存し、様々な資料収集を行う一方で<sup>1</sup>、グラスゴー大学で学び、その後社会に貢献した卒業生達の大学在学時代に関わる資料の収集にも努めている。これは、グラスゴー大学が社会に対してどのような役割を果たしてきたかを証明するための活動となるからである。かつてこのグラスゴー大学に留学した愛橋博士の資料が収集対象となったのも、そういった活動の一環である。

私が愛橋博士の資料と出会ったきっかけは、そんなアーカイブズ学を学ぶ過程においてだった。グラスゴー大学アーカイブズのアーキビストが講師を務める講義の中で、ある日、大学が所蔵する資料の中には、外国人留学生のものもあることが紹介された。それがやがて日本人留学生の資料の話へと進むうち、大学アーカイブズがせっかく収集した資料だが、誰も日本語を読めないせいで、資料の整理が進まず、利用者に提供するための目録作成が止まっている資料があるとの説明がされた。かねてよりイギリスのアーカイブズの手法を実地で習得したいと希望していた私は、大学アーカイブズの資料整理にたずさわられるまたとない機会に遭遇し、早速お手伝いを申し出ることにした。そうした先に待ち受けていたのが、愛橋博士の資料だったのである。

## 2. グラスゴーとグラスゴー大学

さて、本論に入る前に、愛橋博士が2年間にわたり暮らしたグラスゴーの町と、博士が学んだグラスゴー大学の歴史について、まずは簡単に紹介してみよう。

右の写真は、イングランド方面からグラスゴーを訪れる人たちの玄



グラスゴー・セントラル駅 外観

<sup>1</sup> グラスゴー大学アーカイブズはスコットランド、特にグラスゴーを中心に活動した企業資料（Business Archives）の収集活動で世界的に知られたアーカイブズであり、その規模はヨーロッパと言われている。

関口となるグラスゴー・セントラル駅である。駅舎と一体化しているセントラルホテルの外観は、グラスゴーに到着した人々が最初に目にするこの町の威風となっているが、1888年、愛橋博士がグラスゴーに到着した頃、この駅はより南のクライド川に近いところにあったため、ロンドンを経由して汽車で北上した博士が到着したのはこの駅舎ではない。ただし、1900年代初頭、駅が現在の位置に移設された時に駅舎と一体化されることになったセントラルホテルは当時から存在し、グラスゴーに来た愛橋博士もみたであろう。この駅はその名の通り、現在のグラスゴーの中心地にある。

### 2-1. 地理的特徴

グラスゴーはご存知の通り、グレートブリテン及び北アイルランド連合王国に属する国・スコットランドの都市で、人口は首都エジンバラの5倍にのぼる、同国最大の都市である。

同国の地理的特徴を簡単に紹介すると、大きくハイランドと呼ばれる高地帯とローランドと呼ばれる中央の低地帯にわかれる。グラスゴー都市圏の北限辺りから東西にハイランドライン（地質学的呼び名、ローランドとハイランドの境界）が走り、それより以北がハイランドとされる。一方、グラスゴーから南へ向かえば、すぐにSouthern Upland（南部高地帯）と呼ばれる山間部となる。言うなれば、スコットランドには、ローランド地域にしか都市が形成可能な平地がないという地理的状况となっており、そのわずかな平野部の東、北海側に首都エジンバラが、西部大西洋側にグラスゴーが位置していることになる。



気候は大まかに、暖流の北大西洋海流の恩恵を受ける比較的温暖な西部と、海流の影響が届かない寒冷な東にわかれる。しかしながら西部地域は、大西洋からの暖流に運ばれた水分を多く含む大気がハイランドの寒冷な高地にぶつかることにより、西部平地帯に多くの雨をもたらすこととなっている。「一年のうち300日が雨」と言われるほど多雨なグラスゴーだが、その要因はここにある（ただし、1日の数時間に雨が降るといっただけで、一日中雨が降るといっ日は言われるほどに多くはない）。

### 2-2. 町の歴史

続いて、グラスゴーの町の歴史的な背景を簡単にみてみよう。今でこそスコットランド最大の人口を抱える大都市となっているグラスゴーだが、実は歴史上、首都となったことはない。エジンバラをはじめ、ハリウッド映画「ブレイブ・ハート」で知られるスコットランドの英雄、ウィリアム・ウォレスがイングランドに対し歴史的勝利とおさめたスターリンの戦いで著名なスターリン、またクライド川河口にあるウォレスの盟友、ロバート王の拠点であったダンバートンなどの町が国の中心となってきたが、対するグラスゴーはというと、グラスゴー聖堂を中心とした教会自治都市であり、かつクライド川の水運を利用した商業都市としてはじまった町だった。

グラスゴーに大きな変化をもたらしたのはやはり産業革命である。その発展の前史ともいえるのが、クライド川に発展した水運業と、グラスゴーの町の立地そのものだった。川の河口は、現在もアメリカ軍の原潜基地となっているほどの天然の良港である上に、ブリテン島で新大陸アメリカに最も近い玄関口にあたったことから、グラスゴー商人は対アメリカ貿易の主導権を握ることに成功、新大陸から運び込まれるタバコ貿易の富を集中させた上で、アメリカ植民地の受容に応えるための布や鉄砲、皮製品等を取りそろえて輸出するという商業構造をつくる。タバコ貿易の富は、それら植民地へ輸出される製品を製造する工場の建設へつながり、こうしてその後の発展の基礎となる一大富を築くことになる。

第二の段階として、綿織物工業の発展があげられる。スコットランドの地場産業だった綿織物が、たばこ産業によって蓄積された資本、イングランドで発明された織機、スコットランドの水力資源の3つを得て一気に拡大、大規模な労働者の流入をよび、1830年代にはついに首都エジンバラの人口を抜いて、スコットラ

ンド最大の都市となる。

綿織物工業で得た富はやがて重工業化の基礎となり、さらなる産業革命が推し進められることになる。ランカスターの鉄鋼をもとに、造船と機関車製造等を中心とした産業が、グラスゴーを名実ともに世界的都市にする。イギリスではロンドンに次ぐ第2位の都市として、The second city of the Empireと呼ばれ、その富は大英帝国の繁栄を支えたと言われている。東のエジンバラと西のグラスゴーという両都市のライバル関係はつとに知られているが、首都エジンバラに対し、自分達こそがスコットランドの発展を築いてきたというグラスゴーの人々の自負に寄るものであろう。

しかしながら第二次大戦後、グラスゴーの経済は急激に悪化、相次いで造船所は閉鎖され、一時は治安の悪さばかりで名の知られる町となってしまった。90年代以降、様々な改革により生まれ変わった町は、現在、ヨーロッパ諸国の人々にとって訪れたい町の上位に常にランクインするほど、芸術の街として知られている。

### 2-3. グラスゴー大学

グラスゴー大学の創建は1451年である。前項でも述べたとおり、グラスゴーの町は6世紀頃の創立と伝えられるグラスゴー大聖堂を中心に発展してきた。大学は、スコットランドで最初に創建されたセント・アンドリュース大学（故ダイアナ妃の長子・ウィリアム王子が学んだことで知られる）と同様に、聖職者教育からはじまった大学であり、当初はグラスゴー大聖堂が立地する現在のハイストリートの並びに設立された。ハイストリートは中世の街の中心であったが、現在はそれより西のブキャナンストリート、ア



ギルモアの丘にそびえる本校舎

ーガイルストリートの両通り周辺が政治・商業の中心となっている。グラスゴーの町は、その後、さらに西へ西へと拡大の一途をたどることとなる。

イングランドのキリスト教が、16世紀、ヘンリー8世の離婚問題に端を発して英国国教会を新たに創設したことはよく知られているが、スコットランドはというと、同じく新教に位置付けられるとはいえ、カルヴァン派（長老派）と呼ばれる、謹厳実直を尊ぶ厳格な教義が伝統的に信仰される国である。イングランドの哲学や論理学、歴史学といった、いわゆる虚学に重きを据える学問的習慣に対し、実直なスコットランドの国民性が好んだのは実学である。グラスゴー大学はそのような実学を重んじるスコットランドの生んだ賜物であった。グラスゴー大学で現在世界的に高い評価を受けている学問分野は医学、獣医学等の分野だが、愛橋博士の在学当時に名声を博していたのは工学・機械学・造船学等である。このような工学分野を学科として設立したのは、グラスゴー大学が最古と言われており、スコットランドの産業革命を推進する原動力となった。

産業革命期、人口の集中により現在「シティー・センター」と呼ばれている地域の住環境が悪化してからは、富裕層は次第にウェスト・エンドと呼ばれる地域へと「疎開」していくことになるが、グラスゴー大学もその例外ではない。町の産業化、都市化とともに、いわゆるタウン vs ガウン<sup>2</sup>の争いが激化、また町のスラム化により、大学周辺の治安が悪化したことで、大学はウェスト・エンドへの移転を決定。1870年、現在のグラスゴー大学本校舎がギルモアの丘に建設された。建物の規模は現在も、イギリスにおいて2番目に大きい公共建築（1位はイングランドの国会議事堂）とされている。メイン・ゲートは、移転前からの建物を移築したもので、グラスゴー大学の中でも最も古い建築である。愛橋博士が大学に留



大学のメイン・ゲート

<sup>2</sup> タウン=大学のある町に住む人々と、ガウン=大学関係者。黒い学服・ガウンを着ていることからそう呼ばれる。中世以来、この二者の間には、言葉や文化、異なる法制度等から様々な抗争が起こった。オックスフォードやケンブリッジ等の大学町の例はよく知られる。



学したのは1888年以降であるから、大学の移転からまだ20年もたっていない頃ということになる。

#### 2-4. グラスゴー大学と日本人留学生

グラスゴー大学と日本人留学生との関係は、創価大学の北政巳氏や愛知大学の加藤詔士氏の著作が詳しい。実直かつ合理主義を重んじるスコットランドが実学を重んじたことは先に触れたとおりだが、この実学、特に工学や造船学といった、重工業を下支えする学問の盛んだったグラスゴー大学は、殖産興業で近代化を進める明治政府の関心を引いた。そうして最初に招へいされたのが、グラスゴー大学の教授、ヘンリー・ダイアー(1848-1918)である。ダイアーは後に東京大学工学部となる工部省工学寮に招聘され、1873年から1882年の10年に及ぶ在日期间中に、日本の工学専門教育の礎を築いた。ダイアーをはじめとし、彼が引き連れてきたスコットランドのお雇い教師達で後に愛橋博士と深いつながりを持つこととなるアルフレッド・ユイニング(1855-1935)やカーギル・ノット(1856-1922)は、多くの日本人学生をグラスゴー大学へ留学させることに尽力した。そうして派遣された明治の近代化を担う日本の若者は、スコットランド教育の精神でもある、実学を学んだのである。明治の近代化の時期の日本人留学生は官費・私費を含めると3,200人ほどに及ぶと言われるが、そのうちの実に50名程がグラスゴー大学へ留学している。余談となるが、大学アーカイブズで日本人留学生の記録を整理する中、当時マサチューセッツ工科大学行きの拝命を受けた某学生が、そんな二流大学ではなくグラスゴー大に派遣させよ頑としてゆずらなかつたという記録を目にした。グラスゴー大学の当時の日本における位置づけの高さが垣間見えるものである。

アルフレッド・ユイニングのもとで学び、カーギル・ノット教授と日本で最初の地震のハザードマップを作ったとされる愛橋博士もまた、明治政府からグラスゴー大学行きを拝命した、公費留学生の一人であった。

#### 3. 大学アーカイブズと愛橋資料

さて、グラスゴー大学が所蔵する愛橋資料である。愛橋博士資料がグラスゴー大学アーカイブズに収集されているのは、先ほど述べたように、大学が社会に対して果たしてきた役割を説明するためであり、これを

「大学機関をより広い社会的文脈に位置付けるため」と説明している<sup>3</sup>。当該研究者が属する学術分野等における国内外の評価、当該研究者のグラスゴー大学及び附属機関での機関の成長・発展への貢献度、および地域や国家への貢献度を斟酌し、ふさわしいとされた卒業生達の、大学在学時代に関わる資料がその収集の対象となるわけである。愛橋博士の記録はまさに、その収集方針に合致しているであろう。

グラスゴー大学アーカイブズが所蔵する愛橋博士関連の資料は二種類ある。一つは、学生登録証や成績表といった、いわゆる教育機関としての組織運営・管理の過程で作成された大学の機関資料である。もう一つが、愛橋博士がグラスゴー大学に在学していた、主に1888年～90年を中心とした時期に愛橋博士が受け取った親戚・友人や同僚からの手紙や買い物の領収書、小切手記録といったものであり、愛橋博士の曾孫である松浦明氏がその複製物を大学アーカイブズに寄贈したものである。本稿が扱おうとしているのは、主にこの、大量の手紙類となる。松浦氏が寄贈された資料は、複写物とは言いながら、上の写真のように、透明のクリアファイルに丁寧に納められ、保存されている。

アーカイブズでは、資料を出所原則で資料群ごとにまとまりをつくり、それぞれのまとまりもと、例えば記録の作成者別に分類し、さらにそれを時系列に編成するというように、様々なカテゴリーを階層的に編成して整理するという習慣がある。その階層化の方法には、様々なパターンがあるが、それらは資料群全体を見渡して見えてくる記録の構成やまとまりとしての特徴、あるいは各アーカイブズ機関における慣習などで、それぞれに異なってくるものである。

愛橋博士の資料には英語で書かれたものと日本語で書かれたものがあるわけ



大学アーカイブズで保管される愛橋資料

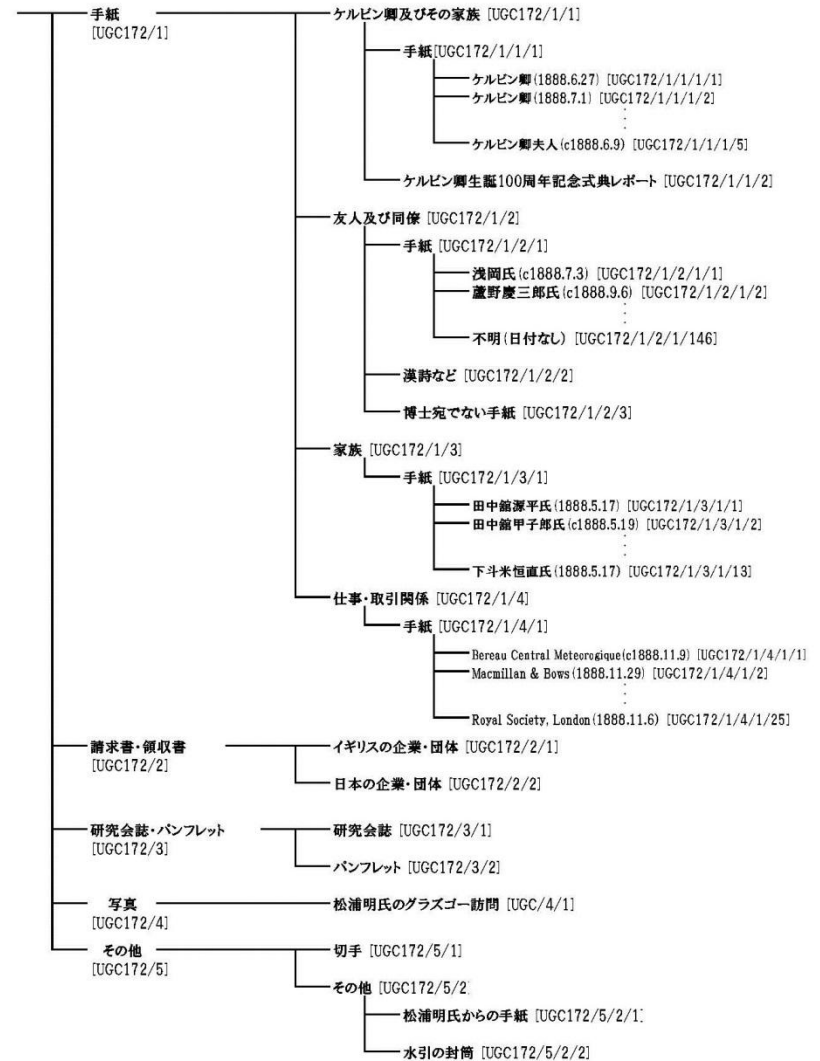
<sup>3</sup> グラスゴー大学アーカイブズ収集方針 ([http://www.gla.ac.uk/media/media\\_61203\\_en.pdf](http://www.gla.ac.uk/media/media_61203_en.pdf)) より。

だが、英語で書かれたものはすでにグラスゴー大学アーカイブズのボランティアによってある程度目録が作られていたので、私が担当したのは主に日本語で書かれた記録となる。

資料は、大学アーカイブズのアーキビストと相談しながら、次ページ図のような形で整理・分類し、目録作成を行った。まず、資料群の大部分を構成する「手紙」と、「領収書」、この二つが愛橋博士の同時代資料となる。ついで「研究会誌・パンフレット」「写真」「その他」と分類したものは、グラスゴー大学と資料を寄贈した松浦氏とのやり取りの中で蓄積された資料となる。「その他」に分類されているものは、愛橋博士の没後 50 周年を記念して造られた、松浦明氏デザインで知られる切手や、松浦氏がアーカイブズ宛に送られた手紙である。松浦氏が大学アーカイブズに寄付金を包まれた際の「水引」までもが、その資料請求番号を付与され、歴史資料として大切に保存されている。公開資料となっていることから、資料番号を記載し適切な手続きをとれば、この水引を見ることも可能である。

さて、メインとなる手紙である。この分類については、おもに友人と家族、仕事・取引関係に大別したが、目録作成の際に指導いただいたアーキビストより、ケルビン卿からの手紙は他の手紙群とは分けるよう指示を受けた。ケルビン卿(ウィリアム・トムソン、1824-1907)はグラスゴー大学で愛橋博士の指導教授であった人で、当時世界最高の物理学者の一人である。10歳にして父親が教鞭をとるグラスゴー大学に入学、その後ケンブリッジ大で学んだ後、22歳でグラスゴー大学の物理学教授に就任、1904年には大学の総長となっている。物理学のあらゆる分野に業績を残したと言われ、その世界にあまり詳しくなくとも、物理で使用する温度の単位で卿の名に由来する「ケルビン」は、聞いたことがある人も多いだろう。イギリスの勲章で最高の荣誉とされるメリット勲章の創設時の受賞メンバーであり、その遺体は死後、ウェストミンスター寺院のアイザック・ニュートンの隣に埋葬された。生前は様々な大学からの誘いを受けるも、生涯グラスゴー大学を離れることはなく、そのことからスコットランドやグラスゴー、そしてグラスゴー大学にとっては特別な人と聞かされたものである。そのケルビン卿からの書簡については、「ケルビン卿」で資料を検索する利用者が見込まれることから、他から別にカテゴリーを立てるよう言われたわけだが、こういった分け方はアーカイブズでは特殊といえよう。

## 田中館愛橋資料の編成 [UGC172]



#### 4. 資料から見える愛橋博士の生活

愛橋博士の生立ちや日本での学生生活はもちろん、また帰国後に東京大学で教鞭をとられるようになって以降の物理学会等での研究をはじめとする世界的活躍はよく知られるところであるが、実はグラスゴーでの生活についてはあまり知られていないと聞く。本章では、筆者が博士の資料の目録を作成する際のメモの記述をもとに、博士のグラスゴーでの生活の一端を、眺めてみたい。

先にお断りしておくが、私は一介のアーキビストであり、歴史学者ではない。よって、資料の内容にかかわる歴史的・社会的文脈の位置づけについての分析を試みるものではない。また本稿を書くにあたって手元にある資料はというと、上述のようにグラスゴー大学アーカイブズで作業をしていた際に作成した、英語での目録のみである。人名についての漢字表記は失われているし、またそもそもくずし字を読むための訓練を受けたわけでもない私が辞書を片手に読み下した博士の友人たちの流麗な手稿を読みおさせたとはとても思えない。したがって、以下には多分に私の想像を働かせて描いた、推測としてお読みいただければ幸いである。

さて、博士がグラスゴーに来たのは人生のどの時期にあたるのか、簡単に確認してから本題に入りたい。

ご存知の通り、博士は1856年(安政3年)、南部盛岡藩に誕生する。1872年(明治5年)、一家で上京、その後慶應義塾、開成学校予科を経て、1878年に東京大学理学部へ入学。1882年同大学を卒業し准教授、翌年助教授となる。グラスゴー大学への公費留学は、1888年から1890年、博士が32歳~33歳の頃にあたる。1891年の帰国後、すぐに東京大学教授を拝命。そんな学問一筋に生きてきた博士が妻キヨ子と結婚したのは、38歳(1894年)の時であったという。

前章でも述べたように、グラスゴー大学が所蔵する愛橋博士関連の資料は、そのほとんどが松浦氏が寄贈した複写物である。その大半は博士がグラスゴー大学在学時に受け取った親族・友人からの手紙であり、その他、銀行や輸送会社との間で交わされたビジネスレターや、博士が物品を購入した際に受け取った領収書などで構成される。親族、友人の手紙は、愛橋博士が自身の身に起こった出来事を書き送った手紙に対する応答であろうし、博士の身にこれから起こる出来事(たとえばお茶会や旅行の誘い、出版の相談等)であろう。領収書からは時々博士が必要としたモノがうかがえるはずである。これらを見ることにより、愛橋

博士のグラスゴーでの生活を、いくばくか再現してみようというわけである<sup>4</sup>。

以下、順を追って愛橋博士のグラスゴーでの生活を、根拠となる手紙を示しながら、追ってみることにしよう。

##### 4-1. 到着

愛橋博士が日本を旅立ったのは1月のことだが、1888年5月1日付のフクシゲ氏の手紙によると、愛橋博士に対するロンドンでの非礼を詫げるような内容から察するに、ロンドンを経由してグラスゴーに到着したと思われる。また、予定より20日ほど長くかかったことで所持金の心配をする下斗米典八郎氏からの手紙(1888年5月14日)も見られることから、到着は同年の3月頃であったのだろう<sup>5</sup>。愛橋博士の無事の到着を喜ぶ親戚・友人からの多くの手紙は5月中旬付けとなっていることから、博士は到着後まもなく、彼ら宛の手紙を書いたのであろう。

グラスゴー大学に残る学籍登録簿(1888 Summer Session Matriculation Album)によれば、愛橋博士の滞在先はアーリントン通り(Arlington Street)22番地となっている。ちょうどグラスゴーのシティー・センターと呼ばれるエリアと大学の中間の辺りに位置し、付近を通った筆者の経験から言うと、大学までは徒歩で約15~20分ほどの距離である。

少し余談となるが、スコットランドをはじめとし、イギリスや欧米諸国ではFamily Historyと呼ばれる、自分の家族の歴史や家系図を調べることが近年、人々の間で人気である。そういった活動で最も利用される機関が、出生や結婚、死亡記録といった様々な公的記録を所蔵するアーカイブズ(公文書館)である。調査の手助けをするために、アーカイブズが所蔵する記録のデータベース化が様々な形で進められている<sup>6</sup>。そのデータベースを頼りに調べたところ、愛橋博

<sup>4</sup> 博士の手紙から、その日々をできるかぎり時系列に再現しようとするものではあるが、グラスゴーやその周辺にいる日飛び地とのやり取りは手紙に記載された日付とほぼ同時期に起こった出来事と考えられる一方で、例えば日本から送付されたものの場合、博士がその内容を知ったのは当然、記載された日付の約一ヶ月後程度となることを、留意点として示しておく。

<sup>5</sup> 当時の日本-イギリスの船旅がどの程度かかるかは、例えば1867年パリ万博の際、施設として渡欧した幕臣一行が横浜-マルセイユ間を約50日で旅していることがある程度の目安となる。

<sup>6</sup> <http://www.glasgowwestaddress.co.uk/> は、1836年から1915年間の、グラスゴーのウェスト・エンドの各住所と世帯について簡単に検索できる民間のHPである。

士が滞在していた頃のアーリントン通り (Arlington Street) 22 番地には、約 8 世帯程が居住者として記録にあらわれており、集合住宅であった想像できる。博士の下宿先となったファーガソン夫人についても、記録に見える。ちなみにファーガソン夫人がアーリントン通り 22 番地に住んでいたのは 1882 年～1888 年とされる。後述するが、博士は学期がはじまる 9 月に転居していることから、ファーガソン夫人自身の転居により、引越を余儀なくされたのかもしれない。なお、愛橋博士は、夫人からの夕食へのお誘いのカードを受け取っている (6 月 5 日付)。

#### 4-2. Social life

愛橋博士がグラスゴーに到着した頃、すでに何人かの日本人留学生が同大学で学んでいた。そのうちの一人で、愛橋博士がグラスゴーに到着して間もないころから頻繁に交流をしている一人が、真野文二 (1861～1946) 氏である。真野氏は東京帝国大学工学部の前身・工部大学校の出身で、卒業後助教授として在籍していた。真野氏がグラスゴー大学に学籍を置いていたのは 1886～87 年であるが、1889 年に帰国するまで、イギリス各地の工場等で技術習得に励んだ。愛橋博士宛の手紙の中には、真野氏がロンドンの観光名所として知られるタワー・ブリッジ (1886 年着工、1894 年完成) の水力機関の設計にたずさわったことが見える (c1888 年 11 月 26 日付の手紙)。グラスゴー大学在学中は、物理で首席、工学・機械学で次席、また工学の筆記試験での成績優秀者に送られるジョージ・ハーヴェイ賞を受賞するなど、非常に優秀な成績を修めている。愛橋博士にとっては、同じ分野を専攻した先輩留学生として心強い存在だったに違いない。

真野氏がグラスゴーに滞在していた頃は、「ハリソン氏」宅に下宿していたらしく、愛橋博士を下宿先に招待している様子が見られる (1888 年 4 月 5 日付、5 月 8 日付手



ケルビングローブ公園より、大学をのぞむ

紙等)。先輩留学生として、愛橋博士が少しでも早くグラスゴーの生活に馴染めるよう、配慮してくれたのかもしれない。

5 月 8 日付の真野氏からの手紙によれば、愛橋博士は氏と一緒に、グラスゴー大学の敷地の南隣に位置するケルビングローブ公園で開催されていた国際科学産業博覧会 (International Exhibition of Science, Art and Industry) に訪れている。この博覧会はグラスゴーの町にとって初めて開催された国際博覧会であり、期間は 5 月 8 日から 11 月 10 日にわたるものだった。愛橋博士はまさに、開幕初日に会場を訪れたようである (博士はまた、博覧会と美術展覧会のシーズンチケットを購入している)。この後、愛橋博士の友人が国内外から博士を訪ねてきているが、博士に会うだけでなく、この展覧会も目当てだったかもしれない。博士を訪ねてきた友人は以下のとおりである。

- ・アメリカのピッツバークより、大木氏 (7 月)
- ・ケンブリッジより、稲垣氏 (9 月)
- ・パリより、和田氏 (9 月)
- ・S. ショウ氏 (9 月、居所については不明)

愛橋博士のグラスゴーでの生活を彩ったのは、博覧会や友人の訪問だけではない。博士は多くの「女性」から、お茶や食事の誘いを受けている。それを一覧にすると、以下のようになる。

手紙の日付	差出人	手紙の内容
1888 年 4 月 30 日	リジー・ガーディナー	おうちに遊びにいらっしやいませんか。
1888 年 6 月 5 日	ジェーン・ファーガソン	お食事にいらっしやいませんか。
1888 年 7 月 4 日	メアリー・ロズ・ボス	夕食においでになりませんか？
1888 年 7 月 10 日	エリザベス・フィンドレイ	一緒にお茶でもいかが。
1888 年 11 月 15 日	リジー・ガーディナー	新しい家に越したので、おいでになりませんか？
(日付不明)	ファニー・ハリソン	私たちのところに遊びにおいでなさい。
(日付不明)	エリザベス・フィンドレイ	キャンベル牧師に会いにおいでになりませんか？
(日付不明)	マギー・ハッチンソン	ゴイル湖への旅行のお誘い
(日付不明)	E. J. ワトソン	お茶にいらっしやいませんか？



この頃のグラスゴーは先にも述べたとおり、産業革命で富を得た人々がウェスト・エンドに多く居住していたため、有閑階級が社交界を形成し、サロンを開いて時々の「旬」な人を呼んで話をきくといったイングランド的慣習が広まっていたという。こういったサロンには、家の主人ではなくその夫人から招待を受けるのが慣例だったというから、おそらく上記の誘いのほとんどは、いわゆる「サロン」的集まりへの招待であったろう。

とはいえ、愛橋博士は誘いを受けただけではない。以下のように、女性にプレゼントを贈ったり、お茶に誘ったり等のことをされている様子もうかがえる。

手紙の日付	差出人	手紙の内容
1888年4月6日	エミリー・ブラウン	素敵なプレゼントをありがとう。
1888年6月26日	エリザベス・フィンドレイ	お茶に誘ってくださってありがとう。
1888年9月20日	マーガレット・マククリーン	音楽の本をお貸しくださってありがとう。
(日付不明)	ファニー・ハリソン	素敵なプレゼントをありがとう。

興味をそそるのは、8月5日付の岩田武弥太氏（1887年から92年まで留学していた人物。愛橋博士が来るまで、アーリントン通り22番地のファーガソン夫人宅に住んでいたようなので、博士の住まいは岩田氏に紹介されたのかもしれない）の手紙である。それによると、愛橋博士がこの頃、女性から「不愉快な経験」を受け非常に立腹していたらしい。この不愉快な経験がいかなるものであったかはわからないが、お茶に誘うこともあったエリザベス・フィンドレイさんか、上記表には記載していないが、愛橋博士の家に遊びに来ている様子のあるファニー・ハリソンさん（真野氏の下宿先、ハリソン家に関わる人物と思われる）等と、なにがしかの関係を邪推してみたくもなる。あくまで、筆者の邪推に過ぎないことを強調しておくが、勉学だけでなかった愛橋博士のグラスゴーの日々を思うと、少しほほえましく感じてしまうのは筆者だけでないだろう。

#### 4-3. 学業など

愛橋博士のグラスゴーでの学業の様子を簡単に紹介して、本章を終わりたいと

思う。

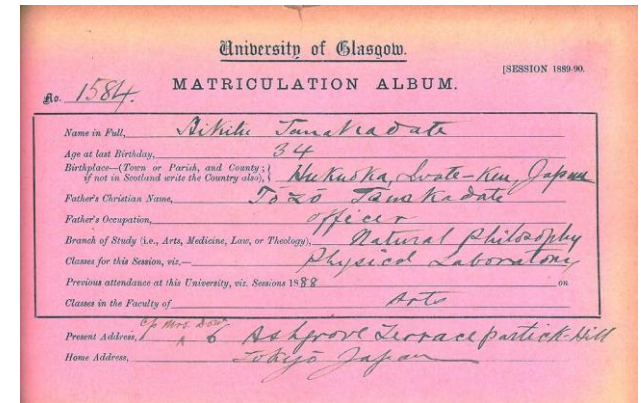
愛橋博士は、大学に学籍を置きながらも、学生というよりはケルビン卿の研究室の「Lab scholar」として所属したと思われる（1888年、澤井氏の手紙）。4月にはグラスゴー大学物理学研究会（Physical Society of Glasgow University）に入会。

イギリスの大学は9

月から新学期がスタートするため、博士はまず、「Summer Session」と呼ばれる夏期講座に在籍したらしい。以後、実験の日々であった様子がうかがえる。

7月頃のケルビン卿とのやりとりをみると、実験が不調続きであったことがうかがえる（7月1日付、ケルビン卿の手紙）。同じ頃、友人の岩田氏から、酒の飲みすぎを注意する手紙を受け取っている辺り、この不調はよほど苦しかったのかもしれない。筆者は物理学については全くの門外漢であるが、同月11日にケルビン卿より「弾道曲線」(ballistic throws)の観察について助言を受けている。この時の不調がいつまで続いていたかは不明だが、8月頃に、愛橋博士の日本での師であり研究仲間であったカーギル・ノット氏が、博士の体調を気遣う手紙を9月頃に送っていることから、やはり7月頃に気分がすぐれないことをノット氏宛に伝えたのであろう。博士はその後何回か体調をくずすことがあったと思われ、かかりつけ医だったと思われるカーク医師に、年間の治療費2ポンド18シリングを支払っている（12月19日付領収書）。

9月、愛橋博士は、グラスゴー大学の自然哲学科の物理学研究室に入る。John Scott Clothier社の領収書によれば、この頃、8ギニーでモーニングコート、ベスト、ズボンの三つ揃えを購入しており（9月11日付）、入学関わる何らかの式典のために揃えたのであろうか。当時、執事の年収が50ポンド前後だったと言われる時代の8ギニー（1ギニーが1ポンド1シリングに相当）であるから、な



愛橋博士の学籍登録簿（グラスゴー大学アーカイブズ所蔵）  
University of Glasgow Archive Services, University  
Collection, GB248 R8/5/10/8



かなかのものである。

前頁の1888-89年の博士の学籍登録簿を見ると、住所がパーティック (Partick) のアッシュグローブ・テラス (Ashgrove Terrace) 6番地となっている。この引越は9月上旬のものであったと思われ、新しい大家のドウ夫人に、9月4日付で家賃と洗濯代あわせて2ポンド17シリングを支払っている。このアッシュグローブ・テラスは現在、ガードナー通り (Gardner St) と名前を変えているが、記録によるとこの住所は三世帯が暮らす集合住宅で、ドウ夫人らが最初の居住者のようであるから、新築であったかもしれない。大学からはちょうど真西に徒歩で15分ほどの距離である。筆者は博士が住んだこの地域から10分と離れていないハインドランドに一時期住んでいたが、たまたま意図せず通りがかった際、その見開けた眺望のすばらしさにシャッターを切ったのが、上の写真である。

10月、愛橋博士がグラスゴーに到着して以来、懇意にしていた真野氏 (ニュー・カッスルのアームストロング社へ) と進経太氏 (マンチェスターへ) が相次いでグラスゴーを去り、またカーギル・ノット氏が日本から博士のために送付してくれた100冊をこえる書籍が、船便で運ばれる最中に海水をかぶる被害にあう等 (10月5~25日付、内外用達会社からの手紙)、つらい出来事が相次いで起きるが、一方で、積み上げてきた研究の成果が評価を受け始める時期でもあった。カーギル・ノット氏との共著 “Magnetic Survey of all Japan” が出版され、世界へと発信されたのである。

この共著については、7月~8月付のノット氏からの校正や版型のコスト等に関する手紙から見えるものである。これらの手紙を受け、博士がイギリスの出版社と取引をしている様子が見られる。筆者の読解力の低さより確実なことは言え



アッシュグローブ・テラスからの眺め

ないのだが、この取引先はとも、現在も学術雑誌の出版会社で著名な Taylor & Francis 社だったのではないかと思われる (10月、11月の同社からのメモ書き)。共著は王立協会をはじめ、British Association や、諸外国の気象庁等にも送付されたい。10月以降、愛橋博士は各地の研究者より、称賛と感謝の手紙を受け取っている。

博士の留学生活は、グラスゴーでは1890年まで続き、その後ベルリンでのさらなる研鑽をへて、日本へと帰国するのである。

### おわりに

以上、愛橋博士が暮らしたスコットランドとグラスゴー、そしてグラスゴー大学の紹介から、博士のグラスゴーでの生活をたどる拙稿におつきあいいただいた。

グラスゴーという街で私自身が体験したことであるが、慣れない外国での暮らしの中で、この国の人々の優しさ・おおらかさに、幾度助けられたか知れない。厳しい自然環境と、イングランドのとの決して対等とは言えない長い確執の歴史の中ではぐくまれた人の痛みを知る気質をもつと言われるスコットランドの人々の思いやりは、厳しい学業を続ける中で、きっと博士の心を助けたことと思う。決して学業のみに没頭するだけにとどまらなかった、博士の豊かなグラスゴーの日々的一端を、お伝えできていれば幸いである。そしてまた、本稿を契機に、グラスゴー時代の愛橋博士についての本格的な研究がはじまることを祈念し、筆を擱くものとする。

### 〈参考文献〉

- ・北政巳『スコットランドと近代日本—グラスゴウ大学の「東洋のイギリス」創出への貢献』丸善プラネット株式会社、2001年
- ・加藤詔士「日本・スコットランド教育文化交流の諸相—明治日本とグラスゴウ—」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要56巻第2号)、2009年
- ・小林照夫『スコットランド首都圏形成史—都市と交通の文化史論—』成山堂書店、1996年
- ・中村清二『田中館愛橋先生』中央公論社、1943年
- ・T. M. Devine, “The Scottish Nation 1700-2000”, The Penguin Press, 1999

【愛橋博士のグラスゴーでの日々、一覧】

日付	出来事	
1888年3月	この頃、ロンドン経由でグラスゴーへ到着か。 (1888年5月1日付 フクシゲ氏の手紙)	
	・ケルビン卿研究室の「Lab Scholar」としてグラスゴー大学に在籍することになる。(1888年 澤井氏の手紙)	・滞在先：22 Arlington Street のファーガソン夫人宅 (1888年 グラスゴー大学登録証) ・無事にグラスゴーに到着した知らせを日本に送る。(5月中旬付の無事到着を喜ぶ日本からの親戚・友人からの手紙)
1888年4月	・グラスゴー大学物理学研究会へ入会 (1888年4月 研究会からの会員規約の送付及び6シリングの会費の領収書) ・カーギル・ノット氏の姉妹、リジーから、訪問先候補リストを渡される。	・先輩留学生、真野文治氏から、ハリソン夫人宅でのお茶会に誘われる。(1888年4月5日付 真野氏の手紙) ・ケルビン卿に自宅での夕食会に誘われる。(1888年4月6日付 ケルビン卿の手紙) ・エミリー・ブラウンさんにプレゼントを渡す。(1888年4月6日付E. ブラウンの手紙) ・リジー・ガーディナーさん宅に招かれる。(1888年4月30日付L. ガーディナーの手紙)
1888年5月	・ケンブリッジ大学図書館のMagnusson氏より、和紙についての問い合わせを受ける。(1888年5月17日付 同氏の手紙)	・真野氏と一緒に展覧会へ行き、その後ハリソン夫人宅でのお茶会へ。(1888年5月8日付 真野氏の手紙) ・町の文具店で、大学ノートやファイル、穴あけパンチ等を購入。(5月19/23日付 Duncan Cambell 文具店の領収書) ・予定されていた物理学研究会のピクニックが中止になる。(5月28日付 物理学研究会の手紙) ・生活費20ポンド10シリングを受け取る。

		(5月30日付 横浜正金銀行の領収書)
1888年6月	・ラボにて実験の日々。(7月1日付 ケルビン卿の手紙)	・大家のファーガソン夫人に夕食に招かれる。(6月5日付 ファーガソン夫人の手紙) ・長岡半太郎氏が日本の童話の木版画90枚を送付すると伝える。(6月7日付 長岡氏の手紙、よって博士が知らせを手にしたのは7月下旬ごろか) ・ハリソン氏より真野氏と一緒に Inverkip の実家に招かれる。(6月22日付同氏の手紙) ・エリザベス・フィンドレイさんをお茶に誘う。(6月26日付E. フィンドレイの手紙)
1888年7月	・実験が不調。ケルビン卿にアドバイスをもらう。(7月1日付 ケルビン卿の手紙) ・ケルビン卿から弾道曲線に関する所見をもらう。(7月11日付 ケルビン卿の手紙)	・お酒の飲みすぎを岩田氏に注意される。(7月3日付 岩田氏の手紙) ・メアリー・ヴァスさんから夕食のお誘いを受ける。(7月4日付M. ヴァスの手紙) ・アメリカのピッツバーグから大木氏が遊びに来る。(10日頃まで滞在か) (7月5日付 ロンドンのY. ワダ氏の手紙) ・エリザベス・フィンドレイさんからお茶に誘われる。(7月10日付 E. フィンドレイの手紙) ・生活費10ポンドを受け取る。(7月11日付 横浜正金銀行の領収書)
1888年8月	・カーギル・ノット氏より、共著の校正ゲラを送付される。(7月24日付 同氏の手紙)  ・この頃、体調不良か。 (9月21日付 ノット氏の手紙)	・女性から受けた「不愉快な経験」に立腹。岩田氏に慰められる。(8月5日付 岩田氏の手紙) ・生活費10ポンド、40ポンド、10ポンドを受け取る。(8月10/14/30日付 横浜正金銀行の領収書)

1888年9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1888年-89年 自然哲学科 物理学研究室へ入学 (1888-89年 大学登録証)</li> <li>・Bottomley氏との物理学実験を行なう。(9月19日C. ノット氏の手紙)</li> <li>・カーギル・ノット氏との共著の刊行が最終調整へ。(8月15/25/26日付同氏の手紙)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・6 Ashgrove Terraceへ引越し。新しい大家さんはDow夫人。(9月4日付 Dow夫人の下宿費+洗濯代あわせて2ポンド17シリングの領収書、また住所は1888-89年大学登録証)</li> <li>・ケンブリッジから稲垣氏が遊びに来る。(9月6/8日付 同氏の手紙)</li> <li>・モーニングコート、ベスト、ズボンの3点セットを8ギニーで購入。(9月11日付 John Scott Clothier社の領収書)</li> <li>・生活費10ポンドを受け取る。(9月9日付 横浜正金銀行の領収書)</li> <li>・パリからワダ氏が遊びに来る。(8月19日、9月2/16/20日付 同氏の手紙)</li> <li>・S. ショウ氏が遊びに来る。(9月22日付 同氏の手紙)</li> <li>・この頃、再び体調不良になる。(10月2日付 進経太氏の手紙)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>受ける。</li> <li>・フランス気象庁より、著書の送付についての感謝状。(11月9日付 フランス気象庁の手紙)</li> <li>・Thomas Muir氏、John McKendrick氏より、著書の送付についての感謝状。(11月6日、16日の同氏らの手紙)</li> <li>・ノット氏より、共著をBritish Associationに送付した旨、連絡(日付の記載ないが、この頃かと思われる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>に列席か(10月11日付 Bow氏夫人、10月19日付植野氏からの招待の手紙)</li> <li>・リジー・ガーディナーさん宅に招かれる。(11月15日付 L. ガーディナーの手紙)</li> <li>・100円を15ポンドに換金、また、25ポンド、15ポンドの生活費を相次いで受け取る。(11月21/29日付 横浜正金銀行)</li> </ul>
1888年10月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アメリカのブラッシャー氏より、博士の論文を賞賛する手紙を受け取る。(9月29日付 同氏の手紙)</li> <li>・ノット氏から博士宛に送付された積荷(主に書籍101冊)が、船便で運ばれる途中で海水をかぶり損害を受ける。(10月5日~25日付 内外用達会社の手紙)</li> <li>・共著に関する校正、出版を行なった後、王立協会へ送付か(10月19/26日付 Taylor &amp; Francis社のメモ及び11月付の1ポンドの領収書)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・真野氏(ニューカッスルへ)、進氏(マンチェスターへ)が相次いでグラスゴーを去る。(10月10日付 真野氏、10月2日付 進氏の手紙)</li> <li>・本を購入(6シリング分)。(10月26日付 John Matheson社の領収書)</li> <li>・生活費10ポンドを二度受け取る。(10月10/27日付 横浜正金銀行の領収書)</li> </ul>	1888年12月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・A. L. Waddell氏より、著書の送付についての感謝状(12月11日付 同氏からの手紙)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本を購入(3シリング分)(12月7日付 W&amp;R社の領収書)</li> <li>・ズボンを購入(1ポンド4シリング)(12月11日付 John Scott Clothier社の領収書)</li> <li>・数学者Cayleyの著書を購入(1ポンド10シリング)(12月11日付 Macmillan &amp; Bows社の領収書)</li> <li>・2ポンド18シリングの診療代を払う。(12月19日付 Dr Kirkの領収書)</li> <li>・この頃、エジンバラへ旅行か。どこかへ忘れ物をする。(12月20日付 ホテル Old Waverleyの手紙)</li> <li>・この頃、特許の取得について澤井氏に相談する。(1889年1月付 澤井氏の手紙)</li> </ul>
1888年11月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・王立協会より、著者を配布した旨通知を</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・リバプールで開催された天長節の祝賀会</li> </ul>			